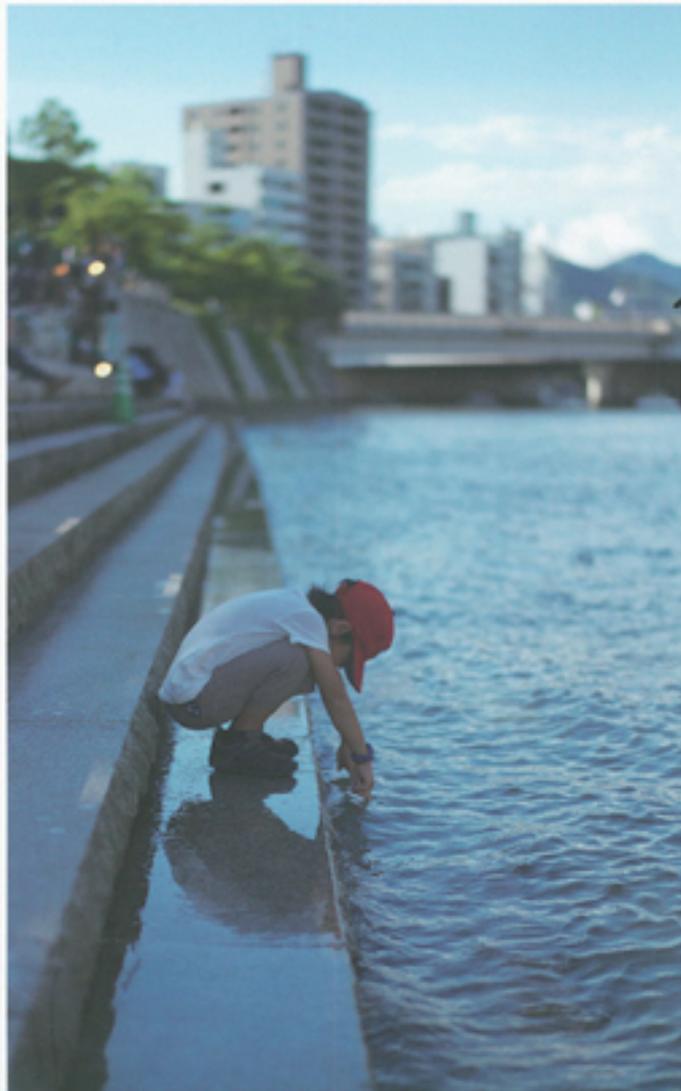


松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編

原爆をまなざす 人びと



広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ

今を生きる私たちは、原爆を
どのように理解し、受けとめているか。

八月六日の広島平和記念公園。そこに集い、思い思いに〈原爆をまなざす〉無数の人びと。その姿を映像によって多角的にとらえ、この日この場所の人びとの営みの全体像を理解し、その意味を解きほぐす試み。ビジュアル・エスノグラフィの方法論入門としても好適。

..... ※本書の六つの映像作品をウェブサイトから視聴できます。.....

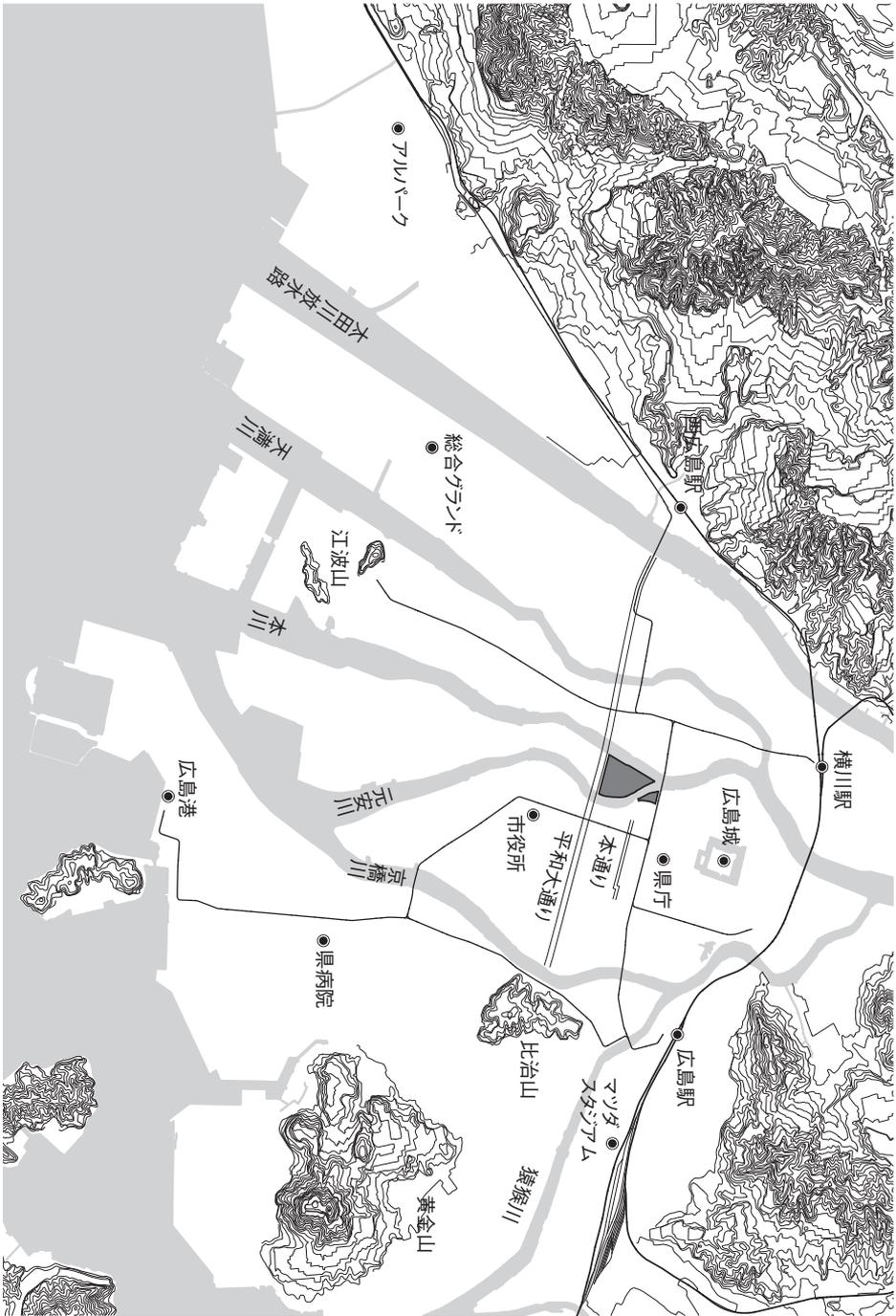
原爆をまなざす 人びと

広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ

新曜社

◆松尾浩一郎・根本雅也・小倉康嗣編
◆清水もも子・後藤一樹・岩館 豊・鈴木雅人・土屋大輔・福山啓子・加藤旭人 著

地図① 広島市街



地図② 平和記念公園



ベースマップとして広島市市民局国際平和推進部平和推進課作成の地図 (<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1288940109390/simple/common/other/4ec5fad9002.pdf>) を使用。

はしがき——今日の原爆爆心地で

私たちは原爆を知らない。「爆心地の話をつたえてくれる人は、いません」。丸木位里と俊によって書かれたこのよく知られた言葉は、原爆を知る難しさの一端を象徴的に示している。そもそも原爆は、容易には理解することもできないような、あり得べからざる常ならざる存在である。私たちはそのような原爆を知り、理解することができるだろうか。

私たちは原爆を知ろうとする努力をさまざまに積み重ねてきた。たくさん貴重な被爆証言を聞くことができる。被爆者や関係する人たちの生き方に触れ、そこから学ぶことができる。また、さまざまな調査や研究が行われており、その蓄積を紐解くこともできる。いまや「爆心地の話をつたえてくれる人」が皆無だとはいえない状況にある。しかしそれでも、私たちはなおも原爆を十分に理解できないままにいるように思われる。私たちがつくる今日のこの社会は、原爆というあまりにも苦い「教訓」を受けとめ、その痛みに寄り添い、共に乗り越えることができるのだろうか。

私たちにとって、原爆を知ることはいまだ重要な課題である。もしかしたら、人類史上世界中で繰り返されてきた戦争の歴史の一コマにすぎないと見ることもできるのかもしれない。あるいは、直接の被害者たちがいなくなれば終幕するひとつの社会問題だと見ることもできるのかもしれない。しかし、このように普遍性の名の下に解消させてしまうことも、個別性の世界のなかに閉じ込めてしまうことも、いずれも適切なことだとは思われない。原爆を知らない私たちが、それをどのように理解し受けとめていくべきか——あるい

は現実はどう受けとめているか——は、私たち社会のあり方そのものと関わってくるといっても過言ではないであろう。

こうした問題は、一般に「被爆体験の継承」としてこれまでも主題化されてきた。そこでは、実際に原爆を体験した被爆者という「伝え手」が片方に置かれ、もう片方に、そこから学びなにかを継承すべき「受け手」が置かれてきた。こうした構図のなかで、時間の経過とともに「伝え手」が減少し将来的にはいなくなってしまうとの予感が、継承を急ごうとする動機となり、また、その困難を感じさせる要因となってきた。

原爆投下からおよそ三四半世紀の時間が経過した。その間に、被爆者であろうと非被爆者であろうと誰もが歳を重ね、さまざまな人生を歩み、いくつもの世代を重ねてきた。このようななかで、「被爆体験の継承」という課題は、さらに重要性を増し、新しい局面を迎えている。〈伝え手Ⅱ被爆者〉と〈受け手Ⅱ非被爆者〉という構図に変化が生じている。非被爆者の、あるいは私たちの役割と責任は、いやが上にも大きくなっていく。いつまでも「受け手」ではいられない。私たちはどのように「爆心地の話」を受けとめることができるだろうか。今日を生きる私たちは、どのようにそれを受けとめているだろうか。

本書が生まれる契機となったのは、原爆に関心を持ち、それぞれの立場からそれぞれの研究に取り組んでいた編者三人が出会ったことである。考え方も研究のスタイルも異なる三人であるが、ともに共通して、どうしても気になる風景があった。一九四五年に爆心地となった地点にほど近い平和記念公園で、毎年八月六日の原爆忌に繰り広げられる光景である。

詳細は本編に譲るが、この日の平和記念公園の風景は驚きに満ち満ちている。無数の人が集まり、それぞれのやり方で、さまざまに原爆と向き合っている。おそらく大半は非被爆者であろう。彼ら彼女らが自分なりに「原爆の話」を理解し受けとめようとしている姿を、ここに見出すことができるのではないだろうか。

しかし、そこで見られる光景の意味を深く追究しようとされたことは過去にない。そもそも、この日の平和記念公園の全体像を明らかにするような試みも、いまだなされていない。私たち三人にとっては、この日の場所のありさまを理解し、その意味を解きほぐすことは、原爆の〈現在地〉を知るための重要な手がかりのひとつになるように思われた。

決定的な経験もあった。緊張と喧騒に包まれる八月六日の平和記念公園も、深夜になるとまったく別の顔をのぞかせる。そうしたなかで、真夜中の閑散とした原爆慰霊碑に手を合わせにくる若者たちが三々五々と、しかし絶え間なく次々に現れるのを目撃したのである。これも詳しくは本編で論じるが、非常に感動的な光景であると感じられた。初めてそこに居合わせた時に感じた熱い気持ちと、その次の年にまた同じ光景が見られることを確かめた時の興奮を、今でも忘れることはできない。私たちはそれから毎年、飽きることもなくこの場所に通い続け、そこで繰り返し広げられることを見つめ続けてきた。世間一般には知られることもなく、しかし毎年必ず現れるこの若者たちは、原爆の〈現在地〉の重要な一面を、そしてその未来を指し示す存在なのではないかと思われた。

こうして私たちは、今現在の八月六日平和記念公園という時空間を対象とし、そこに集まる人びと、つまり〈原爆をまなざす人びと〉に焦点を合わせた共同研究に取り組むこととなった。そして、いろいろな検討を経た結果、あえてビデオ撮影を主とするビジュアル調査を行うことで、その課題にアプローチすることにした。

縁あって多くの仲間が集まってくれた。途中から参加した者や、本書の執筆には参加していない者もあり、若干の出入りはあったが、総勢十三名からなるチームで共同研究が進められた。私たちはフィールド調査から研究のまとめの段階まで非常に深いレベルで共同できた点で、実に稀有なチームだったように思う。本書は十人の執筆者で分担した共著ではあるが、それぞれが自分の論文を持ち寄った論集ではなく、すべての部

分が全員のものとして書かれた「一冊の本」となっている。理想的な共同研究の成果として、私たち一同で本書をこうして世に問うことができたことを誇りに思っている。関わった全員の名前をここに記しておきたい。松尾浩一郎、根本雅也、小倉康嗣、清水もも子、後藤一樹、八木良広、土屋大輔、高山真、福山啓子、岩館豊、鈴木雅人、加藤旭人、長峯ゆりか。

本書の構成と内容について簡単に述べておきたい。書籍本体としては三部構成をとっている。また、あわせて制作した六つの映像作品がオンラインで参照できる。ビジュアル調査という方法をとったことは本書の特徴だが、文章と映像を相互に参照できるようになっている。読者諸氏には、ぜひ「読む」だけでなく「見る」ことを通じて私たちの議論を受けとめていただければ幸いである。

ここで各章それぞれの内容を概観しよう。まず第一部は本書の課題と方法についての議論である。

第一章「〈原爆をまなざす人びと〉をまなざす」では、総論として、私たちの試みが原爆研究としてどのように位置づけられるのかについて明らかにしたうえで、本書がいかなる挑戦をしようとしているのか、それをなぜ、どのようにして表現し伝えようとしているのかについて論じる。本書が目指すのは、八月六日の平和記念公園をまなざすことによって、原爆の意味の〈現在地〉を明らかにすることである。そしてさらに、そうした試みの成果を多くの人びとと分かち合うことを通じて、非被爆者である私たちが自身が、主体的に、自分たちの問題として原爆を問うていくための契機をつくることである。

第二章「ビジュアル・エスノグラフィの方法」では、本研究が採用した方法論について議論する。なぜビジュアル調査による集合的観察という手法をとるのか、具体的にはどのような調査を行うのか、それにはいかなる課題と意義があるか、どのようなデータが得られるのかなどについて検討する。ビジュアル調査だからこそ明らかにできることがある。また、ビジュアル調査だからこそ表現できることがある。そうしたビ

ジュアルの力を信じてまとめられたのが本書にほかならない。

つづく第Ⅱ部「ビジュアル・エスノグラフィの実践」は、ビジュアル社会学研究としての成果を示し、その意味や課題などについて論じる五つの章からなっている。これらの章はそれぞれ単体で独立した議論にもなっているが、私たちが研究成果として制作した映像作品群についての注釈という意味合いも持っている。

第三章「ビジュアル・フィールドワークの経験——広島を見る眼と身体」では、ビデオカメラを手にしてフィールド調査に携わった一調査員の視点から、ビジュアル調査におけるデータ収集／データ生産のプロセスについて論じる。ビジュアル調査という方法が持つ意味を、フィールドのなかで調査員が経験する身体性のレベルから解きほぐしていく。

第四章「平和記念公園をまなざす映画づくり」では、フィールド調査によって得た膨大なビジュアル・データをいかに使うかについて論じている。このプロジェクトからはいくつもの映像作品が生まれているが、そのなかでも特に核心的な存在となった映画『アバーク・ザ・グラウンド (Above the Ground)』の制作の試みを、社会学研究ないし社会調査の表現として位置づけて検討する。

第五章「社会調査映画『アバーク・ザ・グラウンド』の挑戦」では、私たちが制作した映画をいかに伝えていったか、この映画がどのように観られたのかについて述べる。特にアメリカの映画界に向けてプロモーション活動を行い、その反応を得ながら再帰的に映画制作を進めていった経験をふまえて、「映画」という表現形態に取り組んだことの成果と課題について論じる。

第六章「調査表現としてのビデオ・インスタレーション」では、このプロジェクトから生み出されたもうひとつの核となる作品「レプリカ交響曲」を取り上げる。「レプリカ交響曲」は、多数のディスプレイを配置し複数の映像を同時に上映することで、平和記念公園の空間を再現し、観客にその再体験を促すインスタレーション作品である。アートベース・リサーチとしての本作の意義について論じていく。

第七章「〈群像〉をまなざす〈群像〉——イメージ生産の再帰性と集合的無意識」では、映画やインスタレーションのように映像を使ってなにかを試みるのではなく、映像そのものを注視して、そこに再帰的に写されたまなざしの交錯を分析する。延べ八十一時間、二五〇〇ショットに及んだ映像の一コマ一コマには、撮影者と被写体の関わり合いから、平和記念公園の「集合的無意識」までもが刻み込まれているのである。

第三部「八月六日の平和記念公園という場所」は、狭義の意味でのビジュアル調査の枠組みからはいったん自由になって、私たちの調査研究が捉えた平和記念公園という時空間の広がりやそこでの出来事の意味を描くことを目指した三つの章からなっている。ビジュアル・データのみに依拠した議論なのではないが、著者たちがそれぞれの目で平和記念公園をまなざしてきた経験をもとにして書かれている。そのような意味では、この第三部こそ「ビジュアル・エスノグラフィ」なのだともいえるだろう。

第八章「元安橋——平和記念公園の境界」では、今日の平和記念公園という場所が、広島という都市のなかでどのような位置にあるのかを探究する。平和記念公園の内と外をつなぐ象徴的な場所である元安橋に注目して、そこで私たちが見た光景や経験した出来事の検討を行う。それをふまえて、八月六日のこの場所に〈原爆の現在地〉を見出そうとする本書の試みの意味を、より大きな歴史的・空間的文脈の上に結びつけて確かめたい。

第九章「原爆ドームと原爆供養塔——平和と慰霊」では、八月六日の朝の原爆ドームと原爆供養塔の周辺の光景を探る。原爆ドームの周辺は平和を訴える人びとが集い、原爆の災禍の意味が多様に解釈される場となっている。一方、無縁仏の遺骨が納められている原爆供養塔には、遺族や関係者などが訪れ、花を供え、線香をあげる。これら二つの場所の差異を示しながら、平和を訴える行為と慰霊という行為の対極性とその意味を論じる。

第十章「深夜の原爆慰霊碑前に祈る人びと」では、先にも言及した本調査研究への動機を醸成した決定的

な場所——深夜の原爆慰霊碑前に祈りに来る若者たちの思いに迫る。そこでは、肉親などの具体的な死者に祈りが捧げられているわけでも、声高に反核や平和が主張されているわけでもない。若者たちはそこで、なにを、どんな気持ちで祈っているのだろうか。その姿に長年魅了されてきた思いを胸に、自身の経験を織り交ぜながらその祈りに込められた思いを対話的に引き出していく。そこでとつとつと語られる若者たちの静かな一言一言から、原爆の意味の〈現在地〉があぶり出されてくる。

本書はその対象も方法も珍しいものなのかもしれない。それがゆえに、原爆研究としてどのような意義を持つのか、疑問を持たれてしかるべき余地もあるのかもしれない。とはいえそれらは、筆者たちなりに考える、今日だからこそ必要なアプローチなのである。はたしてそれが意味あるなにかをもたらすことができているかどうか、本書を手にとってくださいる方々の忌憚らないご批判を賜りたい。

先に編者三人の出会いが本書の発端になったと書いた。この出会いの契機は、もとをたどっていくと、原爆／被爆者の調査研究を先頭に立って切り開いた石田忠（一九一六―二〇一一）、中鉢正美（一九二〇―二〇一三）両先生の存在にまで行きつく。本書で私たちが試みたことは、両先生の学問からは大きくかけ離れ、しかも足元にさえ及ばないものであるが、自分たちなりに少しでも継承し、未来につないでいきたいと願っている。

（松尾浩一郎）

〔付記〕本研究はJSPS科研費15K13074および25220403の助成を受けたものである。

映像作品について

以下の六つの映像作品がウェブサイト (<http://www.shin-yo-sha.co.jp/video/hiroshin.htm>) から視聴できる。閲覧にはパスワード（ ）が必要である。

『アバーブ・ザ・グラウンド』は本書全体のエッセンスを映像に凝縮したものであり、ひとつのドキュメンタリー映画として鑑賞できる。『シンクロニシティ』はビデオ・インスタレーション「レプリカ交響曲」の模様を収めた記録である。他の作品も本書のなかで不可欠の意味を持つものである。ぜひアクセスしていただきたい。

『アバーブ・ザ・グラウンド』

六十一分。プロデューズ：鈴木雅人。監督：松尾浩一郎。第四・五章、コラム③参照。

『シンクロニシティ——レプリカ交響曲』

十分。制作：後藤一樹・土屋大輔。第六章、コラム④参照。

『〈群像〉をまなざす 〈群像〉』

二十分。制作：後藤一樹。第七章、コラム⑤参照。



『午前八時十五分』

十六分。制作・根本雅也。第八・九章、コラム⑥参照。

『原爆供養塔の朝』

百二十三分。制作・根本雅也。第九章、コラム⑦参照。

『深夜の原爆慰霊碑を見る』

五十二分。制作・松尾浩一郎。第十章、コラム⑧参照。

許可なく複製・放送・公開上映・公衆送信することを禁じます。予告なく改訂されることがあります。

❖目次

はしがき——今日の原爆爆心地で——	1
映像作品について——	iii

第I部 課題と方法—— 1

第一章 〈原爆をまなごす人びと〉をまなごす—— 3

- 一 惨禍と苦しみの意味—— 3
 - 二 意味の〈現在地〉——調査の背景と目的—— 6
 - 三 八月六日の平和記念公園——調査の対象—— 9
 - 四 なにをどうまなごすか——本書のねらい—— 15
- 注—— 18

第二章 ビジュアル・エスノグラフィの方法—— 21

- 一 〈原爆をまなごす人びと〉をまなごすために—— 21
 - 二 ビジュアル調査によるアプローチ—— 24
 - 三 ビジュアル・データが異化する八月六日の広島—— 31
 - 四 集合的観察によるアプローチ—— 38
 - 五 どのようなデータが得られたか—— 44
- 注—— 45

コラム① 写真家たちのひろしま—— 47

コラム② 映画のなかのヒロシマ—— 48

第三章 ビジュアル・フィールドワークの経験——広島を見る眼と身体——55

- 一 調査員の経験から——55
 - 二 集合的観察の実際——56
 - 三 八月六日の平和記念公園に触れる身体へ——64
 - 四 調査を終えて——68
- 注——70

第四章 平和記念公園をまなぞす映画づくり——73

- 一 ビジュアル・データをどうまとめるか——73
 - 二 社会調査から映画づくりへ——79
 - 三 八月六日のさまざまな〈時間〉を見る——82
 - 四 社会調査映画の可能性——88
- 注——91

コラム⑥ 映像作品紹介『アバープ・ザ・グラウンド』——93

第五章 社会調査映画『アバープ・ザ・グラウンド』の挑戦——95

- 一 映画界との交点——95
 - 二 『アバープ・ザ・グラウンド』を読み解く——96
 - 三 アメリカ人の反応——101
 - 四 映画技術に関する課題——104
 - 五 調査表現としての映画——107
- 注——108

第六章 調査表現としてのビデオ・インスタレーション——109

- 一 社会調査からインスタレーションへ——109
 - 二 「レブリカ交響曲」の制作と展示——111
 - 三 八月六日の平和記念公園を再提示する——122
- 注——124

コラム④ 映像作品介绍『シンクロニシティ——レブリカ交響曲』——126

第七章 〈群像〉をまなざす〈群像〉——イメージ生産の再帰性と集合的無意識——127

- 一 イメージ生産の再帰性——127
 - 二 映像に表れるものたち——撮影者と被写体の関わり合いを通して——130
 - 三 眼に見えないものの表れ——まなざしの「ふところ」と「彼方」——144
 - 四 集合的無意識と映像——撮影したのは誰か——149
- 注——151

コラム⑤ 映像作品介绍『群像』をまなざす〈群像〉——154

第Ⅲ部 八月六日の平和記念公園という場所——155

第八章 元安橋——平和記念公園の境界——157

- 一 爆心地に架かる橋——158
 - 二 八月六日に元安橋を渡る人びと——162
 - 三 不確かさの空間——179
 - 四 〈原爆の／現在／地〉の結合と分離——182
- 注——183

コラム⑥ 映像作品紹介『午前八時十五分』……………187

第九章 原爆ドームと原爆供養塔——平和と慰霊……………189

- 一 平和記念公園における平和と慰霊……………189
 - 二 原爆ドームに集う人びと——平和を訴える……………191
 - 三 原爆供養塔を訪れる人びと——身近な人の死を悼む……………200
 - 四 八月六日の意味——平和と慰霊の乖離と接合……………206
- 注……………208

コラム⑦ 映像作品紹介『原爆供養塔の朝』……………210

第十章 深夜の原爆慰霊碑前に祈る人びと……………211

- 一 八月六日深夜の原爆慰霊碑前という時空間……………211
 - 二 なにを、なぜ祈るのか——祈る人びととの対話……………216
 - 三 死者へのまなざしを媒介とした対話の時空間……………257
 - 四 非被爆者にとつての〈原爆という経験〉——その新たな意味と関わりの生成……………262
- 注……………264

コラム⑧ 映像作品紹介『深夜の原爆慰霊碑前を見る』……………267

あとがき……………269

文献……………(1)

索引……………(1)

装幀＝新曜社デザイン室

第I部 課題と方法

第一章 〈原爆をまなざす人びと〉をまなざす

キラキラノ破片ヤ

灰白色ノ燃エガラガ

ヒロビロトシタ バノラマノヤウニ

アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキメウナリズム

スベテアツタコトカ アリエタコトナノカ

パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ (原民喜『夏の花』1947)

一 惨禍と苦しみの意味

一九四五年八月六日午前八時十五分、アメリカが投下した原子爆弾は圧倒的な破壊力で広島という都市を壊滅させた¹。熱線は人びとの体を焼き、爆風は人も物も吹き飛ばし、建物を倒壊させた。ほどなく生じた火災は人びとを焼き、市街地の大半を焼失させた。あらゆる物が壊され、人びとは傷つき、倒れてうめく。ほぼ即死した人びと、助けを求める人びと、その声に耳を貸さず無我夢中に逃げる人びと、水を飲み川に入

りそのまま亡くなる人びと、錯乱したかのように叫ぶ人びと、すでに亡くなった子どもを抱いて右往左往する母親など、それまでの日常は瞬間的に失われ、無秩序な状況が生み出された。原民喜が表したように、原爆はそこにいた人びとを、建物を、そして日常を「バット剥ギトツテシマツタ」のである。

しかし、この核兵器がもたらした惨禍は新しい価値を創出する契機ともなった。より正確に言えば、原爆の投下とそれが生み出した破壊と苦しみは、広島のみならず、日本そして世界の人びとの想像をかき立て、そこから思想や行動を紡ぎ上げるような意味の源泉となった。原爆投下から七十年以上が過ぎた現在、広島は「ヒロシマ」という片仮名で表現されるように「平和」や「反核」の国際的なシンボルとされ、人びとはその記号を解釈し、時に作り変えながら自らの行為を形づくっている。

原爆の災禍に対する解釈の多様性を考えるために、ひとつのアナロジーを提示したい。²⁾ インターネットで利用できる地図である。オンラインの地図で検索バーに「広島」と入力すると、広島県広島市の場所が表示される。オンラインの地図は拡大や縮小も可能であり、この地図を拡大すれば、市内に存在する町々や通りが映し出される。さらに拡大していけば、ストリート・ビューといった機能によって、たとえば平和記念公園の中を歩く人びとの姿などを映し出すことが可能となる。逆に、地図を縮小すれば、「広島」は点となって日本という国の一部として見えるし、さらに縮小を続けるならば世界地図の中に「広島」を見ることができさる。

このイメージをもとに、次の質問について考えてもらいたい。「一九四五年八月六日、原爆はどこに投下されたのか」という問いである。多くの読者が即座に思いつくのは広島という地名であろう。原爆は広島市という都市に投下されたからだ。しかし、オンラインの地図を拡大した時のように、原爆は都市という抽象的な空間ではなく、当時広島（そして現在平和記念公園となっている場所）に暮らしていた人びとの上に投下されたともいえるし、逆に地図を縮小した時のように、原爆は日本という国に落とされたという答え方もで

きる。さらにいえば、原爆は世界に投下され、人類全体がこの出来事を経験したともいえるかもしれない。つまり、「どこに原爆が落ちたのか」あるいは「誰が原爆を経験したのか」という質問への答えは単に地理的な事柄にとどまるものではない。それは、その質問に答える者が原爆の災禍をどのように捉えているのかという解釈に密接に関わっている。そのため、もし誰かが「原爆の惨禍は世界に核兵器の恐ろしさを伝えているのだから、広島は人類の犠牲であった」と言うなら、その人はこの出来事をグローバルな視点から眺め、普遍的な価値を見出そうとしている。逆に「広島が原爆を受けたのは、日本がアメリカの敵として真珠湾を攻撃したからだ」と言うなら、その人は広島をナショナルな視点から眺めていることになる。つまり、原爆投下という出来事を知り、その視点は複数ありうるし、実際、戦後の日本社会（そして世界）において広島は災禍はさまざまな角度から捉えられ、それについて多様な解釈がなされてきた。

だが、インターネットの地図のアナロジーは、単に視点や解釈の複数性を示唆するだけではない。すでに述べたとおり、オンラインの地図は拡大することも縮小することも可能である。このことは、原爆投下を捉える視点の複数性を示唆すると同時に、それぞれの視点によって強調点が変わることを意味している。オンラインの地図を拡大あるいは縮小するのか、どこに焦点を当てるかは、いわば作為の結果であり、その境界線を引く者によって異なる。この点において、誰がどこに境界線を引くのか、つまり、どこに焦点を当て、いかなる意味を取り出し、そしてなにを背景へと退けるのかは作為的でもある。そのため、多様な解釈の背後には、その解釈によってどのようなストーリーが選出され、なにが切り落とされるのかという取捨選択が存在している。³⁾

広島に投下された原爆の災禍は、長崎のそれとともに多様に解釈されてきた。だが、その解釈にはそれぞれに力点が存在し、ある部分が強調され、ある部分には光が当たらないという作為を伴うことになる。

二 意味の〈現在地〉——調査の背景と目的

原爆投下から七十年という時を経て今を生きる人びとは、原爆の災禍にどのような意味を見出しているのだろうか。特に原爆を体験していない非体験者たちは、こうした想像も及ばないような出来事をどのように捉え、なにを紡ぎ出そうとしているのか。つまり原爆の災禍の意味の〈現在地〉を明らかにすることが私たちの調査の課題であった。では、なぜ今を生きる人びと、特に非体験者に焦点を当てるのか。そこには次のような理由がある。

「継承」を問い直す——非体験者に着目する意義

現代を生きる人びとにとっての原爆の災禍の意味を問うことは、「被爆体験の継承」という規範的な価値を問い直すことにつながる。

「被爆体験の継承」とは原爆の「被爆体験」を非体験者に「継承」させる、あるいは「継承」しようとする理念であり実践である。広島においては一九六〇年代後半からこの言葉が表立って用いられるようになり、⁴以後、関連する多くの実践が生み出されてきた。原爆の災禍について教える平和教育が積極的に取り組まれ、被爆者たちもまた自らの体験を語る活動を行うようになった。広島への修学旅行も数多くなされ、現地では平和記念資料館の見学のみならず、被爆者の講話を聞く機会が設けられてきた。また原爆の体験についての手記といった記録集が出され、近年ではアートによる「継承」の実践も増えている。そしてこうした「継承」の取り組みはメディアの注目を引き、報道されている。今を生きる人びとは「被爆体験」を「継承」することを陰に陽に求められてきたといえよう。